

## 会員の広場



### 学びを復興へつなげていく知的プラットフォームへ

桜の聖母短期大学 キャリア教養学科 専任講師  
桜の聖母生涯学習センター センター長補佐  
三瓶 千香子

#### 1. はじめに

桜の聖母生涯学習センター（以下、センター）が開放講座を設置してから 29 年目を迎える。1981 年中央教育審議会が答申に初めて「生涯教育」という言葉を公にした頃、本学センターは地域に学びを開放し、提供し続けてきたのである。先日、あるマスコミ関連企業の社長に、当センターの開放講座パンフレットをお渡しした時のことである。その方は、パラパラとパンフレットを見た後、「カルチャーセンターですね、まるで」という言葉を発したのである。筆者は、この一言にかなりの衝撃を受けたのであった。なぜなら、高等教育機関に附設する生涯学習センターやエクステンションセンターと民間マーケットに存在するカルチャーセンターは、その性質や機能が多分に異なるからである。しかし、地域に情報を発信するマスコミ関連の社長でさえ、高等教育機関の生涯学習センターのパンフレットを見て「カルチャーセンター」と同一に見てしまうのである。

それだけ、当センターをはじめとする高等教育機関のエクステンション関連センターは、その存在を、その機能をまだまだ広めてないと言えるのではないかと思えるのだ。そのマスコミ関連の社長が不勉強なだけだろうという声もあるかもしれない。しかし、このような見方をされたというのは事実である。生涯教育学や生涯学習、大学開放の分野を研究したり、大学内外で関連分野の業務に従事している人間だけが理解しているに過ぎないのではないかと、とも思うのである。私にとって、生涯学習センターの存在の意義を知らしめる努力が足りないという指摘のように感じられ、衝撃的だったのだ。これは、ずいぶん昔のことではない。つい数か月前の話である。

#### 2. 生きる意欲を支援する場所

人生 80 年の時代が過ぎ、今や日本は、人生 100 年の時代を迎えている。古代より長寿は人々の願いであったが、現代社会においてはそれが少々覆ってしまっている感もなくもない。定年退職の早期化、老老介護、未婚率の上昇、社会保障への次世代の不安や負担など、現代社会が抱える問題は枚挙にいとまがない。長寿がごく自然となった日本において定年退職が早期化すれば、仕事がない次の人生の段階いわゆるセカンドステージをどう生きるかが問われることになる。仕事からリタイアした後に、今まで家庭や社会でどのように人間関係を築いてきたのか、またこれからどのように築いていくのかという問題に直面せざるを得なくなるのである。そこで必要になってくるのが、夢中になるコトやモノ、ものごとくにひっきりかりを持つことの楽しさ、友人たち、価値観が近い者と出会う場などであろう。いわゆるこれらは、ずいぶん前から言われてきている「生きがい」を提供してくれるものである。

もちろん「生きがい」は自ら感じるものであり、これらが積極的に本人に与えてくれるわけではない。しかし、何らかのアクションを起こすことや起こせる場所があれば、「生きがい」を見い出すことが出来る可能性が大きいのではないだろうか。

桜の聖母生涯学習センターは、上述したものを「学び」から提供しようという場所である。毎年 150～200 近い開放講座を設置し、地域の方々に少しでも学びがいや生きがいを感じてもらおう努力をしている。「こころ」「かかわり」「教養」「くらし」「資格」「ボランティア」「健康」「外国語」の 8 分野に渡り、多様な講座をほぼ毎日開放している。2 年前ならば、おそらく「日曜日を除いて開放している」と書いていただろうが、詳細は後に譲るが、2012 年度から「傾聴ボランティア養成講座」という講座を日曜日に設置してからは、土日もセンターがオープンすることになり、結局、現在は“ほぼ”毎日、昼夜何らかの講座を行っているという状態にある。「いつでも、どこでも、誰でも」という生涯学習のテーマの観点からすれば、この原則を忠実に守っているセンターとも言える。

### 3. 2013 年度の開放講座プログラミングにおけるこだわり

ここからは 2013 年度の開放講座のプログラム上で、特記すべきことを述べていこう。

(1) 第一に、先にも触れたが「傾聴ボランティア養成講座」の継続設置である。この講座は 2010 年度から設置していた講座であるが、1 回きりの単発講座で開講されていた。そもそも「傾聴ボランティア」という言葉それ自体がマイナーだったということもあり、単発講座でニーズを満たしていたかもしれない。しかし東日本大震災以降、劇的にその様相は変化した。5 回連続にして体系的に学べるようにした定員 30 名のこの講座には、90 名以上の申し込みが殺到したのである。(この講座の詳細については、本機構『UEJ ジャーナル』第 8 号 2012 年 10 月 1 日発行 <http://www.uejp.jp/journal/j08.html>)

周知のように東日本大震災後、福島は世界の「フクシマ」となり、未だに震災の収束には程遠い状態である。がれき処理も除染も遅々として進まず、避難している人々の保障問題も見通しがついていない部分が多々ある。政府や東電への怒りやこの先どのように生きていけばいいのか、新しいコミュニティに馴染めるのかといった不安を抱え込んだ人々は、自らの声をどこに荒らげればいいのか分からぬままなのである。そんな時に重要なのが「ただ横にいて、ただそばにいて、寄り添って声を丁寧に聴くボランティア」という存在なのである。他者の怒り、不安、訴え、希死念慮の声を傾聴するにはスキルが要るのであるが、そのスキルを持った人材を養成するところが世界のフクシマには不足していたのである。一方、このような福島に対して黙ってみてられない、何らかのボランティアをしたい、人を助けたい、復興の一助になりたいという人々も増えてきたのも事実である。この学習ニーズ、社会的ニーズ、復興のニーズから、2013 年度も「傾聴ボランティア養成講座」を継続設置したのは必須であり、人を育てるという使命を背負う高等教育機関であれば至極当然なことであるかもしれない。

(2) 第二番目として挙げるのが「復興講座」である。これは復興に関する一つのテーマを設けて、オムニバス形式で月 1 回程度の講座を行い、多角的に復興を考え、私たち被災地に生きる者が一步前進しようではないかという講演会をシリーズ化したものである。“復興元年”であった 2012 年度は「立ち上がるろう！フクシマ」をテーマとし、6 講演会（共催講演会を含めると 9 講座）を主催し、述べ 1163 名の地域住民が聴講した。またこの復興講座は、桜の聖母短期大学の本科科目「福島学」の一部として組

み入れられ、履修した学生が延べ 316 人受講し、地域住民と学生が同じ空間で、同じ内容を聴き、それぞれの立場で福島復興について感じ、考え、今出来得ることを行動へ移そうとする貴重な機会となったのである。従来は、センター主催の何らかの講演会は地域住民向けであり、学生に積極的に聴講させる仕組みが出来ていなかったのであるが、2012 年度のセンターの復興講座と本科の福島学が一つとなったということは、本科とセンターの相互関係が非常に密となり、新しくカリキュラム構築を考えていく大きなきっかけとなったのである。2013 年度のテーマは、「共に生きよう！フクシマ」である。コミュニティの崩壊・分断という言葉があちこちに聞こえてくる福島において、2012 年度テーマで「立ち上がった」とすれば、次はつながって共生を考えていかなければならない時期であろう。

ここで 2013 年度「復興講座」の詳細を紹介する。

- ◇第 1 回：4 月 6 日(土) (講師) 玄侑宗久氏 (作家・福聚寺住職) **「揺らぐことのススメ」**
- ◇第 2 回：5 月 11 日(土) (講師) 西村隆次氏 (朝日新聞郡山支局長) **「新聞記者から見た福島の子どもたち」**
- ◇第 3 回：5 月 25 日(土) (講師) 久田満氏 (上智大学総合人間科学部心理学科教授)  
**「子どものこころと家族の絆～笑顔が輝く地域づくりに向けて～」**
- ◇第 4 回：7 月 6 日(土) (講師) 鈴木建夫氏 (宮城大学名誉教授・元食品総合研究所理事長)  
**「食からフクシマ“福幸”を！」**

## 【 講演内容の設定 】

第 1 回目は、どうしても「生き方」に焦点を当てた内容にしたかったという理由で、住職であり芥川賞作家でもある玄侑宗久氏に講師を依頼した。繰り返しになるが、震災後、特に福島の人びとはこのまま福島に留まるか県外に避難するか、これからどう生きればいいのかという不安や葛藤、迷いを抱き続けている。そしてその感情を持ってしまっていると自分を責めている人間も少なくない。本学はキリスト教のカトリックの教えを建学の精神としている高等教育機関である。このような迷い多き状況の中で、宗教的な観点から人々にエールを送れないだろうか。そう思い、震災後もずっとフクシマに住み、応援し続けている僧侶・玄侑氏の講演を企画したのである。「カトリックの大学なのに仏教の住職を講師にすると、意外ですね」という声が少なくない。しかし、宗教の相違性は今の福島にはさほど問題ではない。精神的な支柱を必要としている人々にエールを送ることが重要なのである。

第 2 回目と第 3 回目のテーマは、「子ども」に焦点を当てた。震災後、「母子避難」や「子連れ避難」という言葉を頻りに耳にするようになった。避難を覚悟した家族特に母親はどのような状況に置かれ、いかなる心境でいるのか、また避難をせず福島に住み続け、思いっきり外遊びが出来ない子どもたちの今の表情、心情、生きている姿を知ること、私たち地域住民ができることは何なのかを考えられる機会にしたいのである。さまざまな問題を抱えさせられてしまった子どもたち、家族、地域が今以上に笑顔で絆を強くするために、全県くまなく取材をしている新聞記者・西村氏を第 2 回に迎え、第 3 回には心理学者・久田氏を招聘し、子どものこころのケアを中心に展開していく予定である。

最後の第 4 回目は、「食」をテーマの軸に置いた。周知のように、原発問題・放射能問題によって福島の「食」は深刻である。言うまでもないが、私たちは「食」で生かされてる。ならば、福島の「食」の安全性はどうなのか、これから福島の「食」と共生していくには私たちはどのような認識を持ち何に気を付ければいいのか、何をすべきなのかなどを考えていかざるを得ない。「福島の食は危ない」と決め

つけず、復興を「福幸」に変えていくための好機を地域へ提供していく講演としていきたい。そう考え、プログラミングした講座である。

(3) 特筆すべき事項の第三は、他市へエクステンション機能を果たそうとしていることである。いわゆる生涯学習センターの「支店」開校へ本格的に動いたということだ。大学そのものが多くのキャンパスを設けることは、昨今では何も珍しくない。しかし大学に附設する生涯学習センターがその機能を他市へ拡張する例は、全国的にもそう多くはないだろう。桜の聖母短期大学およびセンターは福島市に立地しているが、そこから約 50 キロ南方、車で 1 時間強にある福島県最大の経済都市・郡山市が「支店」設置先である。生涯学習の機会提供を多くの方々へ・・・をスローガンに、「こころ」「教養」「外国語」の 3 分野 9 講座を開講する。

郡山市は福島県の中で最も人口が多く活気がある都市ではあるが、高等教育機関やカルチャーセンターが積極的に生涯学習プログラムを地域へ開放し発信しているかという観点からみれば、いささか元気がないと言える。生涯学習プログラムが皆無というわけではないが、人々の学習欲に「波紋」を作るような「投石的存在」、トリガー的存在もほとんど見当たらないのである。郡山にはザベリオ学園というキリスト教のカトリックの教えを教育の軸においている歴史ある教育機関がある（幼稚園・小学校・中学校）。桜の聖母学院とは、宗教上、古くから深いかかわりがあり生涯学習の理解も深いことから、ザベリオ学園の一角にある「デア館」という旧修道院を借りて、生涯学習センター郡山教室開校へ至ったのである。

(4) 2013 年度の開放講座の内容についてページを割いてきたが、最後はパンフレットの表紙のデザインについて触れたい。センターのパンフレットは、毎年、パンフレットの表紙デザインを変えている。その年、その年のメッセージを開放講座プログラムのみに限らず、表紙から伝えおうとしているからである。2013 年度は、真ん中にゴールドに近い色の福島県の県土の形を置き、それを桜の花びらが囲み、鳥が赤いリボンをくわえて「まなぶ。つなぐ。」というキャッチコピーを強調した。生涯学習関連機関は全国に多々あるが、「ここでしか表せないもの」という“らしさ”にこだわらなければ、その地域に存在する意味が薄まってしまう。全国あちこちにあるような表紙よりも、福島県へメッセージが発信できるようなデザインを何度も何度も検討したのである。

生涯学習という分野は、数十年前なら個人の生きがいのみを追求するレベルでとどまっていたかもしれない。しかし、今や、その学びを他者や地域、社会へ広げ、つないでいくことが重要視されている。「共に生きよう」という時、震災後の福島ではまさに必要なことであろう。

#### 4. 地域の知的プラットフォームを目指して

本学における生涯学習センターは、この数年で急激にその役割が多様化している。150~200 近い開放講座をプログラミングをし、地域に学びを提供し、学習ニーズを満たすことあるいは学習ニーズを発掘することは従来通りである。しかしさらに、ここ最近必要とされているのは、聴講生制度や科目等履修生制度を利用したい社会人への学習相談である。本科の科目に関心があって聴講したいのだがどのような内容なのか、どのような講師なのか、今の職業をキャリアアップしたいがどの科目を受けたいのかなどの問い合わせが増えているのである。2012 年度からセンターのパンフレットには分かりやすく「短大の従業も受けてみたい・・・という方へ」という案内を掲載している。「科目の単位が欲しい」と

いう科目等履修生制度の項目と「短大の授業を受けてみたい」という聴講生制度の項目に分け、その価格も具体的に案内している。このような各種制度の存在は明示できるのだが、ページの関係上、授業の内容や担当講師などシラバスは掲載できない。このシラバスの説明を丁寧にする、科目担当者の教員と受講希望者を事前につなぐことなどが、結果として求められている機能である。その後、受講や単位に関する手続きの窓口である学務部につなぐことも業務の一つであるが、このような一連のコーディネート機能を期待されているようになった。

「大学を開く」とは、図書館や大学の施設を自由に利用してもらうことにとどまらない。この稿の冒頭に話は戻るが、カルチャーセンターとは異なる高等教育機関としての大学・短大が持つ知的インフラや知的人材（教職員や学生）を地域に積極的に届けていこうという姿勢を指すのではないかと感じるのである。桜の聖母生涯学習センターは、今後も、いかにして地域における学習提供の知的拠点あるいは知的プラットフォームで有り続けられるかを途絶えることなく追い求めていく。

---

### 三瓶 千香子 (さんぺい・ちかこ)

1974 年福島県郡山市生まれ。

2000 年 上智大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程前期修了(生涯教育学専攻 香川ゼミ)。

Pei Meets(ペイミーツ)教育・楽習研究所を創設。2006 年 4 月より、桜の聖母短期大学生涯学習センター研究員として、開放講座の企画・運営を所管・研究。現在、同大学講師、生涯学習センター研究員兼センター長補佐。社会活動では、福島県学校教育審議会委員(平成 17 年 10 月～平成 20 年 10 月)、福島県生涯学習審議会委員(平成 20 年 2 月～現在)、福島市生涯学習をすすめる会学識者メンバー、日本私立短期大学協会生涯学習研究チームメンバーなど。2007 年より、南相馬市市民リーダー養成講座の講師。